様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０３１１３

研究課題名（和文）幕末維新期における「公議」の研究

研究課題名（英文）The research of Kogi during the period of the Meiji Restoration

研究代表者
奈良　勝司（NARA, Katsuji）

広島大学・人間社会科学研究科（文）・教授

研究者番号：９０５３５８７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　これまで幕末維新期の一事象として、また近代議会開設の前史の一つという限られた視角からの分析にとどまりがちであった「公議」をめぐる諸相を、明治維新の根幹に関わる重要事項として総合的に分析した。具体的には、政治史・地域史・思想史・メディア史といった複数の観点から当該期の「公議」をめぐるさまざまな動向を、政治参加拡大だけでなく、集約、一致、動員などの観点も盛り込みながら研究会形式で議論を重ねた。
　成果は、研究代表者、分担者、協力者などの手で書籍、論文、研究発表などのかたちで学界や社会に公開・還元した。また、研究会での議論をまとめた論文集を準備中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　最大の成果は、研究会活動を中心とした考察・議論を通して、「公議」概念を維新変革の一要素、副次的産物ではなく、むしろその根幹をなした重要概念として位置づけることに概ね成功したことである。その点は課題期間を通して当該期を扱った学術書や一般書に「公議」という項目を立てたりその内容を組み込んだりするものが増え（当概念が明治維新を論じる際の主たる要素の一つであるという理解が定着し）、研究代表者や協力者も執筆に関わった事実にも表れている。また、「公議」が単に政治参加を目指した運動ではなく、「攘夷」のような対外方針やそのための一致、動員とも関わり、また多数決をめぐる論争を生み出したことも明らかになった。

研究成果の概要（英文）：　This study comprehensively analyzes various aspects of "Kogi" which until now have tended to be analyzed only from the limited perspective of an event during the Bakumatsu Restoration Period or as a prehistory of the establishment of modern parliaments, as important issues related to the foundation of the Meiji Restoration. Specifically, the various trends surrounding "Kogi" during this period were discussed in the form of study groups from multiple perspectives, including political history, regional history, history of thoughts, media history, incorporating not only the expansion of political participation but also perspectives such as consolidation, unification, and mobilization.
　The results were published in the form of books, articles, and research presentations by the principal investigators, contributors, and collaborators, and were made available to the academic community and society. A collection of papers summarizing the discussions in the study group is in preparation.

研究分野：人文学

キーワード：公議　幕末維新　意思決定　上書　攘夷　動員　一致　多数決

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景
（１）幕末維新期における「公議」（ないしは類似の用語としての「公論」）に関する研究は、戦前の法制史分野を起点として、それなりに長い蓄積を有していた。すなわち、当該期に史料用語として用いられた「公議」という言葉を、民主主義とりわけ近代議会制度の発展と絡めて、その前史と位置づける理解である。代表的な研究者としては、明治文化研究会で活動した吉野作造や尾佐竹猛が挙げられ、また戦後になるとこれらの潮流は稲田政次に引き継がれて、古典研究の地位を確立するようになった。

（２）一九七〇年代ごろになると、精緻化した政治史の水準に対応するかたちで、より当該期の具体的な政治過程のなかにこの問題を位置づけようとする研究が、井上勲、宮地正人らによってもたらされた。一九九〇年代には、三谷博による幕末の参予会議や山崎有恒による明治初年の公議所のように、新たな事件や機関に焦点をあててそこに展開した複雑な駆け引きや矛盾の実相を描こうとする研究も登場するようになった。二〇〇〇年代に入ると、幕末維新期に「公議」概念が果たした役割は徐々に高く評価されるようになる。そしてその内容も、奥村宏による地域での展開や三谷博による比較史の視点など多様化を遂げた。議会制に特化した前史やその未成熟・未発達といった理解を越え、維新変革における重要概念と位置づけつつ論文集としてこのテーマをまとまった形で扱う試みも生まれ、論文の絶対数も底上げされるようになった。
２．研究の目的
（１）政治史・地域史・思想史への目配りと各分野における議論の架橋に努めた。上述したごとく、「公議」研究は近年学界において広がりと定着を見せつつあり、幕末維新期の重要概念、キーワードの一つとして機能したことが共通理解となりつつある。しかしながら、まさにそれゆえに、研究の細分化もまた進行してしまうという事態も生じている。つまり、「公議」は当該期の政治社会に多様な次元、多彩なかたちで関わった包括的概念であったがゆえに、その個々の表われを扱った個別実証研究は、政治史・地域史・思想史・メディア史・教育史などのように特定のジャンルのなかで積み重ねられ、こうした小領域間の交流・議論が十分に深まらないまま、個別に成果が積み上げられていく傾向が生じている。そこで本研究では、研究代表者と分担者がそれぞれ政治史・地域史・思想史を担当し、関連する研究協力者、連携研究者、幹事、および若手の大学院生なども積極的に交えるかたちでの継続的な議論の〈場〉を作り、既存の成果を互いに共有して刺激にすること、またそうした〈場〉での思索を通して新たな展望を見出していくこと、そしてそれら作業の積み重ねにより、緻密な実証成果に支えられつつも、細分化した小カテゴリーに分断されないかたちで、「公議」「公論」が当該期の政治社会に果たした総体的な意味を考察する足掛かりを作ることを目的とした。

（２）民主主義の発展（政治参加枠の拡大）にとどまらない多義性とその構造的把握に努めた。かねてより、研究史においては、「公議」や「公論」には複数の要素が内在していることが指摘されてきた。すなわち、古典的な議会制発達史の系譜上に意識されてきた政治参加枠の拡大という意味以外にも、〈正しさ〉などが含意されており、場合によっては互いに対立する政治勢力がそれぞれ自らに都合の良い解釈を「公議」に施し、自己正当化を図っていたともされてきた。しかし、「公議」が単純な概念ではなく、多義性を帯びていたことは事実であっても、それはただ無規則に分裂しながらてんでバラバラに存在していたとは思われない。「公議」が幕末維新期に重要な概念として台頭し、人々の心をつかんで力を発揮したからには、そう機能するに足る背景や性格があったはずである。そこで本研究では、これまで指摘されてきた「公議」の諸側面をふまえた上で、それらが互いにいかなる関係にあり、総体としていかなる構造を形づくっていたのかを、上述した政治史・地域史・思想史といった多角的な視座から検討することを目指した。

３．研究の方法
（１）「公議」概念をめぐる新旧の知見をすり合わせ、活発な議論を行うため、大家・中堅の研究者と若手研究者の交流の〈場〉を作り、また隣接他分野の研究者同士も交流して知見の交換ができるようにした。すなわち、研究期間を通して、世代と小領域を共に架橋するかたちで、各々の視座から「公議」に関心をもつ研究者が集い、理解を発展させていくことができる環境を作り、それを運営維持していくこととした。

（２）上記の方法論にもとづき、具体的には定期的・継続的に研究会を開催し、研究代表者・研究分担者・連携研究者・幹事等に必要に応じて交通費・宿泊費を支弁することで、地域の偏りに制約されることなく、この問題に関する専門家が持続的な議論を行い得る環境を整え、実践した。また、年に一度のペースでシンポジウムを実施し、成果を広く社会に還元するようにした。
４．研究成果
（１）以下のように研究会を実施し、研究発表の蓄積を行った。

２０１７年度
・2017/5/25：山崎有恒「『言路洞開』をめぐって」（立命館大学茨木キャンパス）
・2017/10/21：三村昌司「日本近代政治史研究における『公論』の位置」（キャンパスプラザ京都）
・2018/1/6：奈良勝司「近世後期の世界観と意思決定　―海保青陵の言説からみる―」（キャンパスプラザ京都）
・〃：奥村弘「地域社会形成の観点からみる明治維新と三田藩廃藩　―福沢諭吉と岩倉具視を中心に―」（キャンパスプラザ京都）
・2018/3：奈良勝司「幕末の『公議』と対外問題」（「明治維新期の政治変革　―公議・公論の勃興とその意味―」、歴史から現在（いま）を考える集い、日本史研究会との共催）（平安女学院大学）
・2018/3/24：今村直樹「近世後期藩領国の地域行政と明治維新　―熊本藩領から―」（ルノアール貸会議室プラザ八重洲北口店）
・2018/3/25：寺島宏貴「明治四～六年の地方新聞とその投書」（ルノアール貸会議室プラザ八重洲北口店）

２０１８年度
・2018/9/17：伊故海貴則「横井小楠からみる幕末期の議論構造と世界認識　―道理・武威・一致―」（立命館大学茨木キャンパス）
・〃：出水清之助「激化民権期における政党連帯構想の論理と展開　―『無形結合』論を中心に―」（立命館大学茨木キャンパス）
・2019/1/5：淺井良亮「有志か、徒党か　―『有志之大名』にみる『尽忠』の転回―」（キャンパスプラザ京都）
・2019/3/25：袁甲幸「明治前期の府県庁『会議』　―官僚制における『公論』の展開―」（立命館大学茨木キャンパス）

２０１９年度
・2020/1/5：【成果論集構想検討会】（発表者：奈良勝司、山崎有恒、三村昌司、今村直樹、伊故海貴則、塩原佳典、袁甲幸、浅井良亮）（TKP ガーデンシティ京都）

２０２０年度
・2020/7/18：【成果論集構想検討会】：東島誠「『公論』と『集議』　―中世寺院社会における二つの近代―」、寺島宏貴「末期徳川政権と新聞　―欧字新聞の翻訳筆写―」、出水清之助「自由民権期の『公論』と結合について」、奈良勝司「安政五年の三条実万　―『全国人心一致』をめぐって―」、山崎有恒「『至当の公議』論再考　―木戸と大久保の『公論』はいかにすれ違ったのか―」、袁甲幸「『会議』の時代　―『治者』たちの合意形成―」、ほか（zoom 会議）
・2020/10/3：伊故海貴則「維新期の地域における多数決制議会の導入」（zoom 会議）
・2020/12/19：出水清之助「民権政党形成期における『公論』と『政党』　―政治的結合の正当性論理を中心に―」（zoom 会議）
・2021/3/6：奈良勝司「安政五年の三条実万　―『全国人心一致』をめぐって―」（zoom 会議）

２０２１年度
・2021/7/3：吉村雅美「平戸藩松浦家における『会読』『集会』と洋書理解」（zoom 会議）
・2021/10/23：海野大地「明治末期における地租軽減請願運動と政友会党人派　―桂園体制をめぐって―」（zoom 会議）
・2022/1/8：奈良勝司「慶応四年の三条実美」（zoom 会議）
・2022/3/5：吉田武弘「『公議』の制度化と上院・枢密院　―井上毅を中心に―」（zoom 会議）

２０２２年度
・2022/9/5：山崎有恒「『公議』と植民地」（立命館大学衣笠キャンパス〈zoom によるハイブリッド開催〉）
・2023/2/13：藤野真挙「自由民権期における衆議集約の正当化　―天賦人権論の論理構造と植木枝盛の功利主義受容から―」（zoom 開催）
・〃：岡本健一郎「近世後期の沿岸警備をめぐる対馬藩の役割　―『国家』『国境』観の萌芽をめぐって―」（zoom 開催）

また、以下のように運営会議を開き、成果の集約と研究会運営の方針を論じた。
2017/5/25、2017/10/21、2018/1/6、2018/9/17、2019/1/5、2019/12/11、2020/9/16、2020/9/30、2020/10/3、2021/3/20、2021/5/16、2022/12/30

（２）以下のようにシンポジウムを実施し、研究成果の社会還元に努めた。
２０１７年度

・2018/2/19：朴薫「東アジア史の経験からデモクラシーと公論を問い直す」（第１回「公議」研究会シンポジウム「ヨーロッパ中心史観からの脱皮と東アジア史　―『公論』を手掛かりに―」、立命館大学衣笠キャンパス）
・〃：池田勇太「コメント」（同前）

２０１８年度
・2019/3/24：青山忠正「王政復古前後の柴田藩と公議」（第２回「公議」研究会シンポジウム、立命館大学茨木キャンパス）
・〃：上田純子「関連報告：幕末の親政と御前会議　―萩藩を事例として―」（同前）
・〃：宮下和幸「関連報告：加賀藩における政治意思決定と『藩公議』」（同前）

（３）成果を研究書や論文、入門書等のかたちで公表し、学界・社会に還元した。その成果の主たるものは以下の通りである。
・奈良勝司『明治維新をとらえ直す　―非『国民』的視座から再考する変革の姿―』有志舎、二〇一八年
・池田勇太「幕末雄藩と公議政体論」（小林和幸編『明治史講義【テーマ編】』筑摩書房、二〇一八年）
・今村直樹『近世の地域行財政と明治維新』吉川弘文館、二〇二〇年
・池田勇太「コラム：幕末公議研究の論点」（小林和幸編『明治史研究の最前線』筑摩書房、二〇二〇年）
・三村昌司『日本近代社会形成史：議場・政党・名望家』東京大学出版会、二〇二一年
・奈良勝司「公議」（山口輝臣・福家崇洋編『思想史講義【明治篇Ⅰ】』筑摩書房、二〇二〇年）
・寺島宏貴「コラム：新聞」（同前）
・伊故海貴則『明治維新と〈公議〉　―議会・多数決・一致―』吉川弘文館、二〇二三年

（４）上記のような活動を通して、「公議」概念に含まれる多様な要素（側面）の抽出・確認と、その相互関係への理解（「公議」には複数の意味が含まれていた、様々な政治勢力が各自の文脈で「公議」に自らの都合の良い内容を付与したといった理解に止まらない、「公議」が有した全体構造の理解）を得ることができた。すなわち、「公議」には衆議（多数意見）や正しさ（至当性）が含まれるが、互いに単体では十分な正当性を確保することはできず、為政者は力点の置き方に違いはあれども一貫してその一致を希求していたこと、しかし明治初年の政局の展開のなかでそれは限界に達し、大きな政治分裂につながったこと、しかし以後も一致の理念自体は継続し、行政機構内部での衆議の尊重や会議慣習、在野の自由民権運動などにおいても単なる多数意見に止まらない、その正当化の模索が続けられたことなどが確認できた。また、「公議」概念が当初から政治参加の枠組み自体を問題として展開したわけではなく、その台頭には攘夷思想にもとづく動員としての位置づけや、明治以後は正しさをめぐる多数決の発想との緊張関係があったことなども確認できた。さらに、研究史・史学史としての理解も深めることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計44件（うち査読付論文　24件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 山崎有恒・長谷川澄夫・奈良勝司他７名	４．巻 5
２．論文標題 【座談会】中川小十郎研究のこれまで　これから	５．発行年 2021年
３．雑誌名 立命館　史資料センター紀要	６．最初と最後の頁 165－226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 今村直樹	４．巻 19
２．論文標題 書評 奈良勝司著『明治維新をとらえ直すー非「国民」的アプローチから再考する変革の姿ー』	５．発行年 2021年
３．雑誌名 明治維新史研究	６．最初と最後の頁 60－68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊故海貴則	４．巻 129
２．論文標題 明治０年代の地域社会における「多数決制議会」の導入とその波紋―浜松県を事例に―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 立命館大学人文科学研究所紀要	６．最初と最後の頁 263－308
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 奈良勝司	４．巻 水声社
２．論文標題 「近代日本の土台と知識人の苦悩」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 三浦信孝・鷲巣力編『加藤周一を21世紀に引き継ぐために　―加藤周一生誕百年記念国際シンポジウム講演録―』	６．最初と最後の頁 303-321
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 奈良勝司	4．巻 124
2．論文標題 「三条実美研究の可能性」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『国史談話会報』	6．最初と最後の頁 3-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三村昌司	4．巻 新87
2．論文標題 「明治維新のとらえ方―「近代化」と「国民国家」を手がかりに」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 思潮	6．最初と最後の頁 3-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三村昌司	4．巻 有志舎
2．論文標題 「金内嘉十郎と衆議―新潟県栃尾郷を事例に」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 明治維新史学会編『明治維新史論集2 明治国家形成期の政と官』	6．最初と最後の頁 91-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊故海貴則	4．巻 124
2．論文標題 「明治維新期地域社会における「多数決」導入－静岡県駿河国地域の地租改正をめぐる合議を中心に－」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『立命館大学人文科学研究所紀要』	6．最初と最後の頁 5-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊故海貴則	4．巻 なし
2．論文標題 「明治維新と「公議」‐「多数決」による政治的・社会的秩序の形成‐」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 博士論文	6．最初と最後の頁 1-276
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 奈良勝司	4．巻 17
2．論文標題 条約勅許・万国公法・大攘夷　―条約勅許後の対外関係の構想と展開―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 明治維新史研究	6．最初と最後の頁 17-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 奈良勝司	4．巻 3
2．論文標題 コメント１（特集：金子肇『近代中国の国会と憲政：議会専制の系譜』をめぐる討論）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 拓蹊	6．最初と最後の頁 4-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 奈良勝司	4．巻 3
2．論文標題 書評：金子肇『近代中国の国会と憲政　―議会専制の系譜―』（当日配布資料）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 拓蹊	6．最初と最後の頁 39-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 奈良勝司	4．巻 9
2．論文標題 近世社会の構造から明治維新を考える	5．発行年 2019年
3．雑誌名 史創	6．最初と最後の頁 30-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 池田勇太	4．巻 17
2．論文標題 「卓越」と衆議―王政復古後の立花壱岐―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 明治維新史研究	6．最初と最後の頁 50-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三村昌司	4．巻 862
2．論文標題 史料散歩：新たに見つかった公議人の人名録	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本歴史	6．最初と最後の頁 76-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三村昌司	4．巻 835
2．論文標題 紹介：ダニエル・V・ボツマン、塚田孝、吉田伸之編『「明治一五〇年」で考える―近代移行期の社会と空間』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 歴史評論	6．最初と最後の頁 93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三村昌司	4．巻 834
2．論文標題 紹介：東京大学史料編纂所古写真研究プロジェクト編『高精細画像で甦る150年前の幕末・明治初期日本』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 歴史評論	6．最初と最後の頁 110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊故海貴則	4．巻 18
2．論文標題 横井小楠における「議論」と世界認識　－道理・武威・一致－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 明治維新史研究	6．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊故海貴則	4．巻 668
2．論文標題 明治一〇年静岡県会議員数改革の挫折と「公議輿論」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 立命館文学	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊故海貴則	4．巻 12
2．論文標題 府藩県三治期における三河国諸藩の合議　－「三河国藩集会」の研究－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 年報近現代史研究	6．最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 寺島宏貴	4．巻 128
2．論文標題 戊辰戦争史料の位相 ： 戦記・メディア・「正史」編纂	5．発行年 2019年
3．雑誌名 河鍋暁斎研究誌	6．最初と最後の頁 58-365
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 寺島宏貴	4．巻 48
2．論文標題 明治期国学者吉村春峰のメディア史考証 ： 国立公文書館蔵「新聞歴史」(一八八〇)	5．発行年 2019年
3．雑誌名 メディア史研究	6．最初と最後の頁 143-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 寺島宏貴	4．巻 52
2．論文標題 『土佐国群書類従拾遺』所収『新聞歴史』(一八八〇) ： 諸本及び本文の検討	5．発行年 2020年
3．雑誌名 北の丸：国立公文書館報	6．最初と最後の頁 27-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今村直樹	4．巻 244
2．論文標題 第五高等学校と熊本藩	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本教育史往来	6．最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 今村直樹	４．巻 3
２．論文標題 廃藩置県に対する旧熊本藩士の意見書　―幸準蔵「死罪論」について―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 永青文庫研究	６．最初と最後の頁 31-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 奈良勝司	４．巻 46-9（６月臨時増刊号）
２．論文標題 明治維新論の再構築に向けて	５．発行年 2018年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 165-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 奈良勝司	４．巻 50
２．論文標題 近世社会の思惟構造と明治維新-研究史の状況と展望によせて-	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本思想史学	６．最初と最後の頁 60-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 今村直樹	４．巻 24
２．論文標題 「肥後の維新」を再考するために	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Kumamoto : 総合文化雑誌	６．最初と最後の頁 84-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今村直樹	4．巻 2
2．論文標題 近世中後期の地域財政と地域運営財源―熊本藩を事例に―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 永青文庫研究	6．最初と最後の頁 65-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三村昌司	4．巻 817
2．論文標題 公論世界と政党・名望家	5．発行年 2018年
3．雑誌名 歴史評論	6．最初と最後の頁 13-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三村昌司	4．巻 新84
2．論文標題 近代日本における多数決の導入―明治初年地方民会を中心に	5．発行年 2018年
3．雑誌名 史潮	6．最初と最後の頁 62-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三村昌司	4．巻 839
2．論文標題 書評と紹介・塩出浩之編『公論と交際の東アジア』	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本歴史	6．最初と最後の頁 103-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三村昌司	4．巻 980
2．論文標題 書評・飯塚一幸『明治期の地方制度と名望家』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 歴史学研究	6．最初と最後の頁 51-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 奈良勝司	4．巻 創刊号
2．論文標題 人見・中川両苗の由緒意識と近世～幕末社会	5．発行年 2018年
3．雑誌名 立命館　史資料センター紀要	6．最初と最後の頁 29-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 奈良勝司	4．巻 台湾・国立政治大学編・発行
2．論文標題 海保青陵と近世後期の世界観	5．発行年 2018年
3．雑誌名 「2018第三屆台灣與東亞近代史青年學者學術研討會」會議論文	6．最初と最後の頁 213-228
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 奈良勝司	4．巻 812
2．論文標題 明治維新論の現状と課題	5．発行年 2017年
3．雑誌名 歴史評論	6．最初と最後の頁 5-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 奈良勝司	4．巻 桑名市博物館編・発行
2．論文標題 慶応元年一〇月五日の簾前評議	5．発行年 2017年
3．雑誌名 幕末維新と桑名藩	6．最初と最後の頁 74-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 奈良勝司	4．巻 －
2．論文標題 公議	5．発行年 2022年
3．雑誌名 山口輝臣・福家崇洋編『思想史講義【明治篇Ⅰ】』	6．最初と最後の頁 61-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 奈良勝司	4．巻 54
2．論文標題 維新の〈神話〉と進化論	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本思想史学	6．最初と最後の頁 32-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 奈良勝司	4．巻 －
2．論文標題 明治維新	5．発行年 2022年
3．雑誌名 岩城卓二・上島享・河西秀哉・塩出浩之・谷川譲・告井幸男編『論点・日本史学』	6．最初と最後の頁 234-235
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 今村直樹	４．巻 14
２．論文標題 書評 三村昌司著『日本近代社会形成史：議場・政党・名望家』	５．発行年 2022年
３．雑誌名 年報近現代史研究	６．最初と最後の頁 53-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 寺島宏貴	４．巻 －
２．論文標題 コラム６　新聞	５．発行年 2022年
３．雑誌名 山口輝臣・福家崇洋編『思想史講義【明治篇Ⅰ】』	６．最初と最後の頁 174-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計49件（うち招待講演　11件／うち国際学会　6件）

１．発表者名 奈良勝司
２．発表標題 士紳における儒教と欧化（楊素霞報告コメント）
３．学会等名 第一回　国際オンラインワークショップ　東アジアにおける明治維新の意味（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山崎有恒・長谷川澄夫・奈良勝司他７名
２．発表標題 【座談会】中川小十郎研究のこれまで　これから
３．学会等名 立命館史資料センター座談会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 奈良勝司
２．発表標題 鎮将としての三条実美―和宮帰京問題への対応を中心に―
３．学会等名 広島史学研究会2021年度大会、日本史部会
４．発表年 2021年

１．発表者名 奈良勝司
２．発表標題 慶応四年の三条実美
３．学会等名 「公議」研究会例会
４．発表年 2022年

１．発表者名 奈良勝司
２．発表標題 和宮帰京問題と三条実美　―東京行幸・徳川慶喜出兵論も交えて―
３．学会等名 東アジア思想文化研究会例会
４．発表年 2022年

１．発表者名 今村直樹
２．発表標題 天保期熊本藩の政治抗争と「上書」
３．学会等名 熊本史学会秋季研究発表大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 伊故海貴則
２．発表標題 近代日本社会形成期の「村」―三新法体制下における「共同性」の再編―
３．学会等名 日本思想史学会 2021年度大会・第7回「思想史の対話」研究会「いま、共同体／共同性を問い直す―思想伝達の場をめぐって―」
４．発表年 2021年

１．発表者名 三村昌司
２．発表標題 近現代史部会共同研究報告批判―塩原報告を中心に
３．学会等名 2021年度大会近現代史部会共同研究報告反省会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山崎有恒
２．発表標題 近代日本における「明治維新」認識と植民地支配
３．学会等名 第一回　国際オンラインワークショップ　東アジアにおける明治維新の意味（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 奈良勝司
２．発表標題 「『～はず』と『～たい』のあいだ　―青山維新史における理論と実証―」
３．学会等名 青山忠正先生古希記念シンポジウム「青山維新史を考える」（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 奈良勝司
２．発表標題 「安政五年の三条実万　―『全国人心一致』をめぐって―」
３．学会等名 「公議」研究会例会
４．発表年 2021年

１．発表者名 伊故海貴則
２．発表標題 「明治維新期の地域社会における多数決制議会の導入と「公議輿論」―浜松県民会・静岡県会を中心に―」
３．学会等名 日本経済思想史学会第31回全国大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 伊故海貴則
２．発表標題 「明治 0～10 年代の地域社会における多数決制議会の開設とその波紋－浜松県民会・静岡県会を事例に－」
３．学会等名 静岡県近代史研究会2月例会
４．発表年 2021年

１．発表者名 伊故海貴則
２．発表標題 「幕末維新期における『一国一円』的統治権力の模索」
３．学会等名 近代日本思想史研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 寺島宏貴
２．発表標題 「末期徳川政権と新聞 ―欧字新聞の翻訳筆写―」
３．学会等名 「公議」研究会論文構想会
４．発表年 2020年

１．発表者名 東島誠
２．発表標題 「『公論』と『集議』　―中世寺院社会における二つの近代―」
３．学会等名 「公議」研究会論文構想会
４．発表年 2020年

１．発表者名 奈良勝司
２．発表標題 書評：金子肇『近代中国の国会と憲政　―議会専制の系譜―』
３．学会等名 広島中国近代史研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 奈良勝司
２．発表標題 近代日本の対外観と西洋理解
３．学会等名 「加藤周一を21世紀に引き継ぐために」国際シンポジウム　東アジアにおける加藤周一（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊故海貴則
２．発表標題 府藩県三治期における三河国諸藩間の「合議」機構
３．学会等名 近世史フォーラム
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊故海貴則
２．発表標題 明治0～4年の三河国諸藩の集会
３．学会等名 近代日本思想史研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊故海貴則
２．発表標題 府藩県三治制下における三河国諸藩の「合議」　－「公議」と「郡県」－
３．学会等名 近現代史研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊故海貴則
２．発表標題 明治初年の「三河国十藩集会」と「公議」
３．学会等名 明治維新史学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊故海貴則
２．発表標題 維新期の地域における「議事」の試みと政治意思決定の変容
３．学会等名 近世史サマーセミナー（分科会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊故海貴則
２．発表標題 明治維新期の地域社会における「合議」の転回　－静岡県の地方民会と地租改正－
３．学会等名 東アジア日本研究者協議会国際学術大会（EACJS）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 今村直樹
２．発表標題 近代日本形成期における地域財政の展開　―熊本藩領を事例に―
３．学会等名 近現代史研究会例会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 今村直樹
２．発表標題 近代日本形成期における地域財政の展開　―熊本藩領を事例に―
３．学会等名 近現代史研究会大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 今村直樹
２．発表標題 19世紀熊本藩領の行財政制度と地域社会
３．学会等名 第90回経済史研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 今村直樹
２．発表標題 明治初年の旧韮山代官江川氏と「御囲地」
３．学会等名 近現代史研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 今村直樹
２．発表標題 明治維新と地域行財政―明治3年熊本藩雑税廃止再考―
３．学会等名 熊本史学会秋季研究発表大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 今村直樹
２．発表標題 近世中後期藩領国の地方行政と荒廃農村対策―熊本藩と尾張藩を中心に―
３．学会等名 シンポジウム「熊本藩からみた日本近世―比較藩研究の提起―」（主催：熊本大学永青文庫研究センター、共催：熊本史学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 奈良勝司
２．発表標題 条約勅許・万国公法・大攘夷―条約勅許後の対外関係の構想と展開―
３．学会等名 明治維新史学会大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 伊故海貴則
２．発表標題 横井小楠の議論(公議)構想と世界認識
３．学会等名 2018年度第1回近代日本思想史研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 伊故海貴則
２．発表標題 幕末における「議論」と「意思決定」の問題構造―横井小楠を中心に―
３．学会等名 日韓次世代学術フォーラム第15回国際学術大会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 伊故海貴則
２．発表標題 横井小楠からみる幕末期の議論構造と世界認識－道理・武威・一致－
３．学会等名 「公議」研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 伊故海貴則
２．発表標題 府藩県三治期における三河国「十藩集会」
３．学会等名 第45回機密費研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊故海貴則
２．発表標題 「道理」・「攘夷」・「一致」―横井小楠における「議論」と世界認識の特質―
３．学会等名 東京歴史科学研究会2月例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 池田勇太
２．発表標題 「卓越」と衆議―王政復古後の立花壱岐―
３．学会等名 明治維新史学会大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 奈良勝司
２．発表標題 幕末の「公議」と対外問題
３．学会等名 歴史から現在（いま）を考える集い
４．発表年 2018年

１．発表者名 奈良勝司
２．発表標題 近世後期の世界観と意思決定　―海保青陵の言説からみる―
３．学会等名 「公議」研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 山崎有恒
２．発表標題 「言路洞開」をめぐって
３．学会等名 「公議」研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 三村昌司
２．発表標題 日本近代政治史研究における「公論」の位置
３．学会等名 「公議」研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 奥村弘
２．発表標題 地域社会形成の観点からみる明治維新と三田藩廃藩　―福沢諭吉と岩倉具視を中心に―
３．学会等名 「公議」研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 今村直樹
２．発表標題 近世後期藩領国の地域行政と明治維新　―熊本藩領からー
３．学会等名 「公議」研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 寺島宏貴
２．発表標題 明治四～六年の地方新聞とその投書
３．学会等名 「公議」研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 奈良勝司
２．発表標題 三条実美論 ―過激性と穏健性をどう統合して理解するか―
３．学会等名 近代日本思想史研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 奈良勝司
２．発表標題 蟻の目と鳥の目 ―次世代フォーラムと研究の変遷―
３．学会等名 日韓次世代フォーラム2023 OB/OG日韓新進研究者ホームカミング行事（日本側ミーティング）（招待講演）（国際学会）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 山崎有恒
２．発表標題 「公議」と植民地
３．学会等名 「公議」研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 今村直樹
２．発表標題 近代移行期の「地域資産」をめぐる論点
３．学会等名 日本史研究会12月例会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 寺島宏貴
２．発表標題 明治初期地方新聞の形成―明治5～9年刊『信飛新聞』紙面の検討―
３．学会等名 国史学会令和四年度大会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計12件

１．著者名 今村直樹	４．発行年 2022年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 424
３．書名 熊本大学永青文庫研究センター編『細川家文書 意見書編』	

１．著者名 池田勇太	４．発行年 2021年
２．出版社 清水書院	５．総ページ数 91
３．書名 武士の時代はどのようにして終わったのか	

１．著者名 三村昌司	４．発行年 2021年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 259
３．書名 『日本近代社会形成史―議場・政党・名望家』	

１．著者名 今村直樹	４．発行年 2020年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 373
３．書名 『近世の地域行財政と明治維新』	

１．著者名 池田勇太（分担執筆）	４．発行年 2020年
２．出版社 筑摩書房	５．総ページ数 270
３．書名 明治史研究の最前線	

１．著者名 山崎有恒（分担執筆）	４．発行年 2019年
２．出版社 国書刊行会	５．総ページ数 308
３．書名 人物からたどる近代日中関係史	

１．著者名 今村直樹（分担執筆）	４．発行年 2019年
２．出版社 熊本大学附属図書館（展示展図録）	５．総ページ数 24
３．書名 熊本藩に生まれた近代　―手永・惣庄屋制と地域行政―	

１．著者名 奈良勝司	４．発行年 2018年
２．出版社 有志舎	５．総ページ数 338
３．書名 明治維新をとらえ直す―非「国民」的アプローチから再考する変革の姿―	

１．著者名 今村直樹（分担執筆）	４．発行年 2019年
２．出版社 愛知県	５．総ページ数 740
３．書名 愛知県史　通史編5　近世2	

1．著者名 小林 和幸編（池田勇太が部分執筆）	4．発行年 2018年
2．出版社 筑摩書房	5．総ページ数 368
3．書名 明治史講義　【テーマ篇】	

1．著者名 伊故海貴則	4．発行年 2023年
2．出版社 吉川弘文館	5．総ページ数 349
3．書名 明治維新と〈公議〉　―議会・多数決・一致―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	山崎　有恒 (YAMAZAKI Yuko) (00262056)	立命館大学・文学部・教授 (34315)	
研究分担者	奥村　弘 (OKUMURA Hiroshi) (60185551)	神戸大学・人文学研究科・教授 (14501)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	池田　勇太 (IKEDA Yuta)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	三村　昌司 (MIMURA Shoji)		
研究協力者	寺島　宏貴 (TERASHIMA Hiritaka)		
研究協力者	今村　直樹 (IMAMURA Naoki)		
連携研究者	東島　誠 (HIGASHIJIMA Makoto) (10364837)	立命館大学・文学部・教授 (34315)	連携研究者の廃止にともない研究協力者に変更。

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関